

かつて慈恵に在学した興味ある人物

その一 シーボルトの曾孫・楠本周三

吉村昭氏の作品には、シーボルトの娘・楠本いねを扱ったものがいくつかある。[ふおん・しいほとん娘] もその一つである。同氏は、この長編を書くに当たって、長崎を訪れ、県立図書館長から貴重な資料を見せてもらった。それは、シーボルトの孫娘・山脇高子が、長崎の著名な史家・古賀十二郎氏に内密に打ち明けた話を筆記したものであった（いわゆる「山脇タカ子談」である）。吉村氏は、その資料の一部を自書「歴史の影絵」のなかの「洋方女医楠本イネと高子」に転載した。筆者はそれを読み、強い感銘をうけた。そして、楠本周三なるシーボルトの曾孫が、慈恵を卒業して医師になったことを知った。筆者は、この「洋方女医楠本イネと高子」を引用しながら、また周三について分かったことを追加しながら、ここにシーボルトの末えいたちについて纏めてみたい。

フランツ・フォン・シーボルト

ドイツ人、フランツ・フォン・シーボルト (Philipp Franz von Siebolt, 1796-1866) がオランダ商館の医官として長崎にきたのは文政6年(1823)8月であった。それから6年間わが国に滞在し、縦横の活躍をなし、江戸時代にきた他のいかなる外人医師よりも大きな影響を日本の医学界に残したことはよく知られている。

彼は1796年2月17日、南独ヴェルツブルグの由緒ある医家に生まれた。由緒ある医家というのは、祖父も父も伯父二人も医科大学の教授であり、その家系には解剖学、外科、産科などで名をあげた学者が多かったからである。祖父カール・カスパーはヴェルツブルグ大学の解剖学教室を創った人であり、ま

た外科医としても優れていたといわれる。父ヨハン・ゲオルグ・クリストフは、同大学の生理学教授であり、同時に外科をよくしたが、シーボルトがまだ2歳に満たないときに若死にした。伯父のアダム・エリアスも有名な産科学者であり、その息子（シーボルトの従兄弟）カルル・テオドール・エルンストは比較解剖学の大家として知られている。

シーボルトは、ヴュルツブルグ大学で医学を修め、傍ら博物学、民族学を勉強した。1820年に同大学を卒業し、内科、外科、産科についてドクトルの学位を取得した。しばらくしてオランダに移り、蘭領東インド勤務の陸軍外科少佐に任ぜられ、同時に植民地における自然科学の研究に従事することを命ぜられた。彼は幼時から日本に憧れ、日本に渡る手がかりを得ようとしていたから、これでやっとその第一歩を踏み出すことができたわけである。1822年9月、オランダを出航し、ジャワ（現インドネシア共和国主島）に向かった。

ジャワに着いてからの彼は、砲兵隊つきの軍医をしていたが、しばらくして突然日本行きのおとずれた。蘭領東インド総督から長崎出島のオランダ商館の医官になることを命令されたのである。シーボルトにとっては、長年の夢がまさに現実のものになったわけであり、オランダ政府にとっても、かねてからシーボルトの学識を利用して、日本と親交を深め貿易を振興しようとしていたから、その意図が現実になったのであった。

長崎に着いたシーボルトは、西洋人の居留区域である出島の中で生活するようになった。この出島は洋人を閉じ込めておく性格をもったもので、島と陸地を結ぶ箇所には役人が常駐しており、洋人が島から出ないようにきびしく監視されていた。

しかし長崎奉行は、次第にシーボルトの豊かな学識を無視できず、彼の行動にはかなり寛大な態度をとるようになった。文政7年（1824）には、長崎郊外の鳴滝に塾を開くことを許している。シーボルトはこの鳴滝の塾に集まってきた弟子たちに外科、眼科、産科の実技を教え、また多くの患者の治療に専念した。

シーボルトの名声はたちまち全国に広がり、遠方から病人が続々とかつぎこまれ、それとともに多くの学生がシーボルトの教えをうけに集まってきた。

それは九州から東北にいたるほとんど全国から馳せ参じたもので、その中には高良斎、二宮敬作、石井宗謙、湊長安、岡研介、平井海蔵、高野長英、小関三英、伊東玄朴、児玉順蔵、戸塚静海らの多くがいた。総勢60人にもなったといわれる。

シーボルトの愛人・楠本お滝

シーボルトが長崎にきてから2年がすぎたころ、彼は一人の美しい遊女と情を交わすようになった。シーボルトは30歳であった。オランダ屋敷のある出島には、おらんだ行きと称される遊女たちだけは出入りが許されていた(人種の偏見から西洋人になじむ遊女はほとんどいなかったといわれる)。その遊女の中に、奇麗な眼をした、目鼻だちの整った美しい女がいた。引田屋抱えの其扇という19歳の遊女であった。其扇は本名をお滝といい、文化4年(1807)三人姉妹の次女として生まれた。父は長崎で商売をしていたが経営が思わしくなく、借財をつくって店を閉じた。そして15歳のとき遊女として引田屋に売られたのであった。其扇はその美しい容姿にくわえて、慎ましくまた聡明であったので、出島の洋人たちの話題になった。シーボルトは、宴席にはべる其扇の容姿を初めて見たときから、その美しさのとりこになり、彼女をしばしば呼ぶようになった。

其扇を知って間もない文政9年(1826)2月、シーボルトはオランダ商館長とともに、将軍・家斉に謁見するため江戸に向かうことになった。日本の内部を少しでも奥深く知りたいと思っていたシーボルトにとっては、この旅はまたとないよい機会になった。彼はこの旅で日本の多くの知識人と交渉をもつことになった。シーボルトの広い学識を吸収しようと多くの人たちが彼の周りに集まってきたのである。その中には、大名の島津重豪、奥平昌高ら、蘭学者の桂川甫賢、大槻玄沢、宇田川榕庵ら、眼科医の土生玄碩、針灸の石坂宗哲、本草家の栗本瑞見、天文方の高橋作左衛門景保、探検家の最上徳内らの多くがいた。シーボルトはいたる所で日本人に医療の実際について教えた。とくに眼科ではベラドンナを用いて瞳孔を開かせる実験を見せて一同を驚かせた。眼科医・土生玄碩はその方法をさらに詳しく教わりたいため将軍から

拝領した（葵の紋入りの）紋服をシーボルトに贈った。また高橋作左衛門は、シーボルトが秘蔵する世界地理の本を入手したいため、国禁の日本地図を彼に譲った。

シーボルトは7月7日、長崎に帰った。この旅の間じゅう、彼は一日も其扇を忘れることはなかった。其扇に対する想いはつのるばかりで、彼女を遊女にしておくことにはもはや耐えられなくなった。彼は引田屋に交渉して多額の金銭をあたえて其扇を落籍し、鳴滝の塾にかこった。其扇は落籍と同時に名前を本名のお滝にもどし、シーボルトもオタクサ（お滝さん）と呼んで彼女を愛した（彼は日本で採取した紫陽花に *Hydrangea Otaksa* という学名をつけているが、この *Otaksa* はオタクサからきているといわれる）。やがてお滝は身重となり、文政10年（1827）5月6日夜、出島で無事女兒を生んだ。そしてその子はいねと名づけられた。

文政11年（1828）、シーボルトが長崎にきてからもうすでに5年が経過していた。それは日本での任期が満了する年であった。彼は、お滝親娘を愛しながらも帰国の念おさえがたく、帰国することを決意した。

その年の秋、九州地方は大きい台風にみまわれた。そして長崎の港内に停泊していたオランダ船が大破した。悪いことに、この船の積み荷のなかにシーボルトが国外に送りだそうとしていた国外禁止の品々が多く発見されたのである。これが有名なシーボルト事件である。シーボルトは、禁制をおかしたかどできびしい取り調べをうけることになった。禁制の一つは、高橋作左衛門から入手した日本地図であった。さらにシーボルトの家をしらべると、土生玄碩から贈られた徳川家葵の紋入りの紋服がでてきた。

長崎では高良斎、二宮敬作などの親しい門人や多くの通詞が捕えられ訊問された。その報せはただちに江戸へとどき、高橋作左衛門は青網のかかった駕籠でかつぎ出され奉行所に引き立てられた。つづいて土生玄碩も逮捕された。シーボルトの門弟たちはつぎつぎと嫌疑を受けて奉行所へ連行され、拷問をうけ、冬の寒さにしん吟した。その数五十余人を数えたといわれる。

シーボルトの愛人お滝も、奉行所に呼び出され厳しい追及を受けた。しかし、お滝はシーボルトの不利になることは云うまいと、ただ「知りません」を

繰り返すばかりであった。上記〔山脇タカ子談〕には次のように書かれている。「シーボルト事件ノ際ニハ祖母タキハ白洲デ尋問ヲウケマシタガ、カネテ其ノ父カラシーボルトサンハ恩人ダカラウツカリシャベツテハイケナイト云ハレテキマシタノデ、ナカナカ度胸ガアツテシーボルトノ不利益ニナルコトハ少シモ申シ立テマセンデシタ。ソレデ取調ノ役人モ随分手コズツテキタサウデス。時ノ奉行ハ、ナカナカ美シイ女ダガ度胸ノシツカリスワツタモノダト、感嘆シテ申サレタサウデス」。

高橋作左衛門は獄中で病死したが、懲罰のため死体は塩づけにされ改めて死罪にかけられた。さらにその長男・小太郎、次男・作次郎はともに遠島になった。紋服を贈った土生玄碩は改易され（身分を下げられること）、長男・玄昌は奥医師を免職になった。その他五十余人の門弟たちは苛酷な刑を受け、永牢後病死したものも少なくなかった。

シーボルトに対する判決は国外追放という刑罰であった。シーボルトはお滝と娘いねに別れを惜しみながら、文政12年(1829)12月5日、日本を追放されて行った。シーボルトは、高良斎や二宮敬作ら主な弟子に、お滝といねのことをくれぐれも頼みながら長崎を去った。ときにお滝22歳、いね2歳7か月であった。

シーボルトの娘・楠本いね

ひとり身になったお滝は、しばらくして和三郎という男と結婚した。二宮敬作(1804-1862)は、お滝親娘の世話をしていたが、お滝の結婚にはそれほど反対ではなかった。シーボルトとお滝の間はもともと正式の夫婦というものではなかったからである。それよりも、二宮には遺児いねのことが心配であった。人種的偏見の強い時代であったから、混血児の将来を想うと暗澹たる気持になるのであった。その二宮もシーボルト事件に関与したかどで、郷里宇和島に謹慎せねばならず、いねのことを気にしながらも長崎を去らねばならなかった。二宮は農家の出で誠実な人物であったから、シーボルトの信任は厚く、それだけに門人のなかではもっとも重い刑をうけた。

それから11年がたった天保11年(1840)、いねはこの宇和島の二宮敬作に



シーボルトの娘・楠本いね
(1827-1903)

ついで医学を学びたいと心に決めた。彼女は
まだ13歳であったが、その彫りの深い顔か
ちはやがてすばらしい美人になることを約束
していた。しかし彼女は、当時の異人に対す
る偏見から、自分は普通の女性の幸福は望め
ないと決めていた。母が異人シーボルトと情
交し、自分を生んだことを恨まずにはいられ
なかった。自分は学問で身をたて、自分で道
を開いていく以外に生きるすべがないと心に
決めていた。二宮は、このいねの申し出に賛
成し、自分の家(卯之町仲之町)にとどまらせ、
熱心に蘭学、外科学を教えた。

司馬遼太郎氏の〔街道を行く〕の一節に、いねがかつて学んだ卯
之町仲之町の現在の情景がでている。

「敬作の故居のある路地は幅二メートルあまりで、道路はセメントで
かためられている。当時は石畳だったのではないかと思われるが、両
側の家々は上方風の下町のふんいきがある。

『この路地には、おイネさんのいいつたえがあります』

私にそう教えてくれたのはこの町の文化財専門委員の門田正志氏
である。イネが医学の勉強のため敬作にひきとられていたころのこ
とで、

『目の色のちがった可愛い娘さんがこの路地をゆききしていた』

というだけの伝承だが、土地でこういう話をきくと、いまそこに
イネが日和下駄を鳴らして歩いてきそうに思える』

しばらくして、いねは父シーボルトが産科に長じていたこともあり、また
二宮のすすめもあって、産科を学びたいと思いはじめた。それで二宮は、同
じくシーボルトの門人であった石井宗謙(1796-1861)の門をたたくようにす
すめた。いねはこの忠告にしたがって、弘化2年(1845)2月、岡山下ノ町で
産科婦人科を開業していた石井のもとに弟子入りした(石井は、シーボルトの

参府紀行のなかで Sjögen (ショウゲン) と記されている人物である。

石井は恩師の遺児であるいねを熱心に教育し、いねもそれにこたえた。しかし、石井はいつの間にかいねの美しさに心の平静を失っていった。やがて、いねは石井の子をみごもってしまった。生まれた女兒がつまり高子(嘉永5年(1852)生れ)である。これが従来「イネ、石井宗謙に嫁し高子を生む」といわれてきたことである。

しかし先述の[山脇タカ子談]によると、事実はそんなに単純ではなく、本当は次のようであったという。

「母イネト石井宗謙トノ関係ヲ申シマセウ。母イネハ、石井宗謙ヲ頼リテ医術ノ研究ニ従事スルコトニナリマシタ。

祖母タキ(其扇)ハ、私ノ母イネノ落付具合ヲミル為ニ、石井ノ宅ヘ(長崎カラ岡山ニ)遙々タズネテ参リマシタ。而シテ母イネノ修行スルサマヲ見届ケ、漸ク安心致シマシテ天神丸ト云ウ船ニ乗ッテ長崎ヘ帰りマシタ。

其際母イネハ、石井ト共ニ船ニ乗リマシテ、母(タキ)ヲ見送りマシテ、天神丸ガ帆ヲアゲテ出船ヲスル、母ハ石井ト二人帰りマス途中、船中デ石井ニ口説カレマシタガ、母ハ石井ヲキライマシテ、懐中ニシタ短刀ヲ以テ野獸ノヤウナ石井ヲ防ギマシタケレドモ、石井ノ暴力ニ抵抗デキズ、トウトウ処女ノ誇リヲ破ラレマシタ。

母ハ一度石井宗謙ニ姦淫サレマシテカラ、其後ハ一度モ石井ト肉交ハアリマセンデシタ。母ハ、石井ヲ蛇蝎ノヤウニキラッテイタノデス。

処ガ母ハ遂ニ妊娠イタシマシタ。而シテ私ヲ生ンダノデス。カウシタ因果デ、私ハ生まレマシタ。母ハ何モ天意デアラウ、天ガタダ子トシテ私ヲ授ケタノデアラウト、アキラメマシテ、私ヲタダト名ヅケマシタ。

母ガ分娩イタシマシタ際ニハ、産婆ヲ使ワズ、自分デ臍ノ緒ヲ切ッタサウデス。

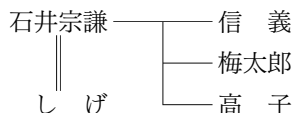
母ハ私ヲ分娩イタシマシテ後、長崎ヘ帰りマシタ。母ガ出立ノ時ニ石井ハ見送りヲイタシマシタガ、母ハ人デナシノ石井ト大イニ恨ミ罵リマシタサウデス。

母ガ石井ヲ厭フタコトハ並大抵ノ事デハゴザイマセンデシタ。母ハ石井ヲ甚

ダ恨ンデキマシタ」。

つまり高子の証言によると、いねは石井に乱暴されて、高子を身ごもったというのである。

石井の女性関係にはいろいろ問題があったらしい。彼の系譜は一応



となっているが、本当は本妻しげとの間には子供がなく、いねを含めて三人の女性に二男一女を生ませたのである。信義と梅太郎は別々の妻の子供である。石井信義の方はのちに東京で高名な医官（東大医学部の前身・医学所の病理学教授）になり、高子のいろいろな相談相手になっている。

こうして、いねは高子を抱いて長崎に帰った。そしてようやく心の傷も癒えたころ長崎摩屋町の阿部魯庵についてふたび修学を始めた。安政元年（1854）、二宮敬作は、宇和島に謹慎して以来初めて長崎を訪れ、いねを見舞った。そして、いねの身のうえにおこった全てのことを理解した。二宮はいねに再び宇和島にきて医学を修行するようにすすめた。そしていねもこれに従った。いねは高子をつれて宇和島をおとずれ、再び二宮のもとで医学を研鑽することにした。二宮は翌安政2年、藩医を命じられ、いねも二宮の屋敷の近くで医院を開業した。洋方女医としてのいねの名は日をおって高まっていた。蘭学の勉強にも心をかけ、大村益次郎（村田蔵六）に師事し、その上達ぶりは大村を驚かせたという。

シーボルトの孫・楠本高子（のち嫁して山脇高子）

安政6年（1859）7月6日、シーボルトは、長男アレキサンデル（13歳6カ月）をつれて、30年ぶりに長崎を訪れた。シーボルトはすでに63歳になっていた（彼は50歳のときドイツ貴族の娘と結婚し、アレキサンデルをもうけたが、その妻もすでに死亡していた）。シーボルトを待っていたのは、夫と死別して独りとなっていた52歳のお滝、32歳のいね、7歳の高子、それに中風で半身不随になっていた二宮敬作とその甥の三瀬周三らであった。この時の情

景についても〔山脇タカ子談〕は次のように語っている。

「シーボルト再度渡来ノ際ハ、出島ノ甲比丹部屋デ、祖母タキ、母イネ、私三人ハ会见致シマシタ。ソノ際、シーボルトハアノ毛髪（追放されてヨーロッパへ去ったシーボルトに、タキが送った自分の毛髪のこと）、其他ノ品々ヲ祖母ヤ私ニセマシテ、『如何ナ日モ如何ナ日モ』決シテオ前タチノコトハ忘レタコトハナイト申シマシタ。ソレデ、祖母タキモ、母イネモ、私モミナ胸一杯ニナリマシテ泣キマシタ。

シーボルトガ、祖母タキ、母イネ、私三人ニ出島デアヒマシタ際ニハ、母イネダケガ少シ蘭語ヲツカイマシタガ、シーボルトハ終始日本語ヲ使イマシタ」と。

シーボルトをとりかこんでお滝、いね、高子の三代の女たちが泣いたというのである。このときの涙は、シーボルトに再会できた嬉し涙でもあっただろうが、それよりも生老愛別といった人生のより深い悲しみにたいする涙であったのではないだろうか。

シーボルトは、はじめ出島にいたが、ついで鳴滝の昔の邸に移った。彼はそれから4年近く長崎に滞在し、昔のように動植物を研究したり、診療したり、新しい門人たちに教えたりした。この間、二宮敬作の甥・三瀬周三が二宮にかわってよく面倒をみた。そのころ長崎ではオランダ医ポンペ（1829-1908）が活躍のさい中であった。

いねは、宇和島の伊達宗城侯に厚い知遇をうけ、伊達家に病人がでるとその都度呼ばれるほどであった。伊達侯からは、今後いねという名を伊達の伊とシーボルトの篤（ト）からとって、伊篤（イトク）とよぶよう命ぜられた。また高子は生まれたときタダ子と名づけられたが、これも伊達侯の指示で高子と改められた。彼女は母いねに似て大変な美人であった。慶応3年（1867）、伊達侯の仲介で、高子（15歳）は三瀬周三（1839-1877）と華燭の典をあげた。その席には、お滝、いね母娘も列席した。三瀬は、大村益次郎の弟子で大阪府医学校（阪大医学部の前身）の教師であり、また蘭学にも精通していた。

明治2年、大村益次郎は、京都で刺客に襲われ、同年11月5日に没したが、その臨終の場には三瀬周三・高子夫婦、いねらのゆかり深い人たちが居合わ



シーボルトの孫娘・楠本高子
(1852-1938)

左は最初の夫・三瀬周三

せ、その最後をみとった。

いねは、その後オランダ医ポンペ、ボードウイン、マンスフェルトらに師事して西洋医学を研鑽した。そして、明治3年2月には今度は東京にでて、京橋区築地で産科医院を開業し、洋方女医としての名をいっそう高めた。明治6年ころからは宮中で産科医として、また外科医として活躍した（福沢諭吉の推挙によるものであった）。明治10年頃いったん長崎に帰ったが、同22年に再び上京し、居を麻布狸穴にさだめた。そして明治36年8月26日、いねはそこで76歳の生涯を閉じた。

三瀬周三と高子は仲睦まじい夫婦であったが、惜しいことに三瀬は明治10年

(10月19日)に死去した。高子はその後、山脇泰助という医師（佐賀柄崎病院院長）と再婚し、三人の女兒をもうけた。しかし、その山脇もコレラで急死し（明治19年9月）、彼女はふたたび若い未亡人になってしまった（この時高子は山脇の第三子を身ごもっていた）。上述の「山脇タカ子談」には、

「山脇ト私トノ間ニ生マレマシタ子供ハ三人イマシタ。

第一 初 明治14年7月1日午後1時10分没ス。8カ月。

第二 滝 祖母ノ命日ニ生誕シタルニ由リ祖母ノ名ヲ付ケマシタ、武雄（地名）デ生マレタノデス。39カ40歳ノ頃死ニマシタ。気が狂イマシテ、東京ノ山脇ニハイロイロト世話ニナリマシタ。

第三 タネ 鉄道局出勤米山恒章ノ妻トナリ、現今東京市外戸塚字諏訪130ニ住ス」。

と記されている。

ところで、高子は、この山脇との間の三人の女子以外に、その前に周三と

いう男子を産んでいる。この楠本周三こそ、成人後東京慈恵医院医学専門学校に学んだ、この小論の主人公である。

シーボルトの曾孫・楠本周三

この楠本周三については、従来は「高子、片桐重明に嫁ぎ楠本周三を生む」ということになっている。しかし、高子が正式に結婚したのは、上記の三瀬周三と山脇泰助の二人のみであり、片桐の妻になったことはない。片桐は、高子の異母兄にあたる前記石井信義のところに出入りしていた医師である。

片桐重明との関係、周三出生の隠れた事情についても〔山脇タカ子談〕は次のように明らかにしている。

「私ト関係ノアッタノハ三瀬周三、片桐重明、山脇泰助ノ三人デス。

私ハ片桐ヲウランデイマス。私ガ三瀬ト夫婦ニナリマシテカラ、折々、石井信義（謙道ともいう、高子の異母兄）ノ宅ヲタズネマシタコトガアリマシタ。其頃カラ片桐ハ私ニ想イヲカケテイタノデス。三瀬ガ没シマシテ、鹿児島戦争（西南ノ役）ノアリマシタ頃、片桐ハ長崎ニ来テ私ノ宅ヲ訪ネマシタ。三瀬ハ、明治十年ニ没シマシタ。其後私ハ、長崎デ母イネト共ニ八坂町笠野ノ邸宅ノ向フ側ニ在ッタ笠野ノ借屋ヲカリテキタノデス。母イネハ、私ニ産科ノ稽古ヲサセタイト云ウ考エデシタ。

コウイウワケデ、私ハ東京ニ行クコトニナリマシテ海路東上イタシマシタ。何デモ船ガ湊川ノアタリニ来タ時ニ片桐ハ私ヲ口説キマシテ、トートー私ハ彼ノ毒手ニカカリマシタ。（強姦サレタノdeal）

東京デ石井信義ハコノ事ヲ聞イテ大イニ立腹イタシマシタ。母ハシカタガナイト思ウタノカ、片桐ヲ婿ニシヤウトイタシマシタ。トイウノハ、私ハトウトウ妊娠イタシマシタカラデス。

片桐ハ私ヨリ二歳バカリ年上デシタ。片桐ハ今日デモ生存シテイマス。片桐ハ学問ノナイ男デ、アンナ男ニ身ヲ汚サレタカト思ヘバ、今デモクヤシクテナリマセン。

サテ、私ハ妊娠ノ身トナリマシテ長崎ニ戻リマシタガ、其頃山脇泰助トイフ人ガ前カラ私ニ想イヲカケテ居マシタ。是非私ヲ貰イタイト云ウコトデシタ

ガ、私ハ身重ノコトデシタノデ、母ハ体裁ヨク云ヒ逃レテイマシタ。而シテ、私ハ身ニツニナッタノデス。其子ガ周三デゴザイマス。周三ハノチ楠本ノ籍ニ入レタノデス」。

ここまで読んでくると、どこまで非運な親子だろうと嘆きたくるのである。母いねは石井宗謙に、高子は片桐重明に、奇しくも二人とも船中でおかされ、妊娠し、子を産んだのである。気の毒な母娘である。

山脇との結婚のいきさつについても〔山脇タカ子談〕は説明している。

「私ノ分娩ノコトハ、山脇ノ耳ニ入りマシタ。併シ山脇ハ、妊娠ノママデキテクレテモヨイノニトヤサシク云ウテ呉レマシタ。コウシタ具合デ、私ハ分娩後何デモ三月位モタチマシテカラ、山脇ニ嫁シタノデス」。

最後に、高子は片桐重明のことを再び口にしている。

「私ハ、片桐ト私トノ関係ニ就イテ今初メテ、アナタニ、打チ明ケマシタシダイデス。ドウゾコノ秘密ダケハ何人ニモ漏ラサヌヤウニ御願ヒイタシマス。私ハドウシマセウ、飛デモナイコト迄、シャベツテシマイマシタ。コンナコトヲオ談スル筈デハアリマセンデシタ」。

この高子の告白を聞いた古賀十二郎氏は、「おいね、高子兩人ノ秘密ヲ聞カサレテ、且ツ驚キ且ツ悲シマザルヲ得ナイノdeal。併シ事実ハ事実deal。お滝さん、おいねさん、おたかさん、コノ三人ノ薄命ハ知識ノミ研キテ徳ヲ重ゼザル学者達ノ罪悪ヲ暴露スルモノニ非ズシテ何ゾヤ」と怒り嘆いている。全く同感である。

古賀氏はさらに、「予ハ、永久ニ兩人ノ秘密ヲ忘却ノ川ニ投ジテ了イタイ。併シおいねさんやおたかさんが、後年誤解サレルコトガアルカモ知レヌ。ソノ際ノタメニ此処ニコノ秘密ヲ記シテオク。後世ノ史家ハ、予ノ意ノアル所ヲ了解スルコトモアルベシ」と加えている。

そして、この〔山脇タカ子談〕を見せてもらった吉村昭氏は「イネと高子について小説を書こうとしていた私には、この資料によって事情を十分理解することができたし、古賀氏の『後年誤解サルコトガアルカモ知レヌ』というあやまちは、おこさずにすんだわけである」と追記している。

さて、楠本周三のことである。とにかく彼はこのようにして生まれたのである。その出生にどのような事情があったにしろ、楠本周三がシーボルトの曾孫であることに違いはないのである。祖母となったいねは、この孫が三瀬周三のような立派な医師になることを願って周三と命名した。そして高子が山脇と再婚したとき、周三をいっそう不憫に思ったのであろう、彼を楠本家の養子にして手元に引きとった。

いねは周三を医師にさせるべく決心し、周三を伴って(先述のように再度)上京し、麻布狸穴に産科医院を開いた(明治22年、いね62歳、周三10歳?であった)。周三は、その後いねと苦楽を共にしながら遂に東京慈恵医院医学専門学校(慈恵医専)に入学し、医師になり、いねの希望を叶えることができた。しかしこの周三に関する確かな史実は(筆者の関心がここに集中しているにもかかわらず)それほど多くはない。彼の誕生が筆者の推測ではおそらく明治12年であること、明治30年から5年間独協中学に在学したこと、慈恵医専を明治41年に卒業していること、卒業後東京病院で研修し、その後舞鶴海軍病院に勤務したこと、そして大正年間に死亡していること、ぐらいである。

まず、その周三の誕生の時期である。高子が三瀬周三と死別して長崎に帰っていたころ、つまり[山脇タカ子談]による西南戦争のころ(三瀬周三の死亡した明治10年10月19日から翌11年)、片桐と一緒に上京し、そのときに妊娠したとすれば、その誕生の時期は明治11年末以降のはずである。また高子が山脇と再婚し、その第一子の誕生日(明治13年12月)から考えて、明治13年以後ではあり得ない。そう考えると、周三の誕生は明治12年と仮定するのが妥当であろう。

周三は明治30年に独協中学に入学し、35年に卒業している。おそらく医師になるための近道と考えたのであろう。気になるのはその年齢のことである。明治30年の入学といえは18歳になるのである。普通、小学校(6年)を終えてそのまま入れば明治24-5年の入学、12-3歳であるはずであるから、普通より6年ばかり年を食っている勘定になる。当時は小学高等科と称して小学卒業後さらに2年の課程があったから、そこを終えて中学に入ったとしてもま

だ4年ばかりの不明な時間がある。その理由はよく分からない（何かそれまでに病気その他の延期すべき理由があったのだろうか）。

周三は独協中学から慈恵医専に入学し、明治41年にそこを卒業している（慈恵医大同窓会名簿による）。卒業時の年齢は29歳になる。順調に卒業すれば21歳であるから、中学を卒業してさらに2年ばかり浪人して（明治37年に）慈恵に入ったと考えるべきであろう（当時の慈恵は相当難関であったらしいから、それほど珍しいことでないのかも知れない）。先に述べたように、いねは明治36年8月に死去しているので、それは周三の浪人中の出来事だったのかも知れない。いねは周三の行く末を心配しながら旅立ったのだろうか。

ついで、彼の死亡時期である。周三は、昭和3年7月に出版された〔東京慈恵会医科大学一覧〕名簿には死亡者欄に出ている（残念ながら、大学にはこれより古い〔一覧〕はない）。つまり周三はおそらく大正年間に死亡していたわけである。当時としても40歳半ばないしそれ以前という大変若死だったのである。ではないだろうか。

（筆者は、周三が成人するまでの間には次のようなことがあったのではないかと、かなりの確度で想像する）。周三の誕生（明治12年）以来、いねは周三を長崎の手元に引き取り、そこで平穏な生活を送っていた。ところが明治19年9月、高子の夫・山脇泰助がコレラに感染して急逝した。高子はその時、山脇の第三子を身ごもっていたため、いねの宅で出産し（明治20年）、それ以後いねの世話になることになった。

いねは高子と3人の孫（周三、滝、たね）と生活を共にして、経済的な不安を感じなくなった。そこで彼女はもう一度東京に出て産科を開業し、周三を医師に育てながら、しかも高子ら親子もそこに呼んで一緒に生活できないかと考えた。いねは早速明治22年、周三を伴って上京し、麻布狸穴に産科医院を開業した。そして翌々明治24年に高子親子をそこに呼び、いね宅に同居することにした（明治24年5月、実際に山脇高子、滝、たねが、いね宅に同居する旨の届けが麻布区役所に出ている）。

その後は周三が成人するまで、楠本いね、周三家族と山脇高子、滝、たね家族が仲良く一緒に生活したものと想像される。

周三は明治 37 年に高木兼寛創立の慈恵医専に入学しているが、この医学校をいねに紹介したのは福沢諭吉であったと想像される。福沢は、いねとは彼女を宮内省の産科医に推挙したとき以来の知己であり、また高木とは松山棟庵を通じて、慶応義塾医学所、成医会講習所設立以来の知己であったからである。高木との関係は、高木の岳父・手塚律蔵（改め瀬脇寿人）が福沢の朋友であったから、もっと古くなるかも知れない。

あとがき

前記「慈恵医大同窓会名簿」に、昭和 15 年卒業者の死亡者欄に楠本周篤という人物がいる。名前からして、また年代からして周三の子息であるに違いないと思われた。本籍地を調べると、やはり長崎市鳴滝五十四番地である。鳴滝の地は、シーボルトが鳴滝塾を開いたところであり、また古賀氏の「山脇タカ子談」の冒頭に「大正 12 年 11 月 13 日、鳴滝、楠本チエ子宅にて聞く」とある鳴滝であるから、周篤が周三の子息であることは間違いない。周篤の篤は、伊達侯からいねのために戴いた伊篤からとったのであろう。そう云えば、この篤という字はもともとシーボルトの篤（ト）からきていたのである。

追記：投稿後、『シーボルト前後（中西啓著、長崎文献社、長崎、1989）』が出版されており、そこに楠本家の墓のことが書かれていることを知った。それによると、その楠本家之墓の左面には、
実相院法林恵空大姉 明治 36 年 8 月 26 日没

楠本イネ 77 歳

円明院徳巖慈杏居士 大正 9 年 2 月 29 日没

楠本周三 42 歳

正覚院徳室宝妙法大姉 昭和 39 年 11 月 26 日没

楠本チエ 80 歳

裏面には、昭和 45 年吉日 楠本周篤建之 とあるという（楠本チエは楠本周三の内室である）。

筆者の推測はほとんど当たっていたわけである。高子の名がないのは、再婚し山脇家の人間になったからであろう。

湯浅 秀氏（昭和 22 卒）の話によると、楠本周篤は永らく東京都

の杉並保健所長を務め、昭和 57 年に逝去したという。また、彼みずから自分はシーボルトの末孫であることを告げていたともいう。楠本周篤については、もっと情報が集められるはずであり、それをもとにすれば、楠本周三の像ももっとはつきりするであろう。今後の課題である。